

## アドラーをもう一度読まなければ

野田俊作

### 要旨

### キーワード：

昨年から今年にかけて、いくつかの専門書や心理学事典のアドラー心理学の項の分担執筆の話が舞い込んできた。気が進まなかったのだが、ことわると、他に著者がいないのでアドラー心理学抜きで出版されるに決まっていた、それもシヤクだったので全部引き受けた。自分がひどい遅筆であったことをつい忘れてかたっぱしから引き受けたものだから、締め切りに間に合わないものが多く、出版社をすっかりやきもきさせてしまった。それはそれとして、それらを執筆することは、私にとってアドラー心理学をもういちど見直すよい機会になった。私はこれまでにアドラー心理学が確立され完成された体系だと思ったことは一度もない。アドラーが死んだとき、それはまったく未完成未整備のままわれわれに残された。ドライカースやその他多くの後継者たちの仕事は、アドラーが残した「ひっくりかえった玩具箱」の一部を整理し、いくらかを補充したものの、それはいささかやつつけ仕事の観があって、あまり感心できない。

特にアメリカの学者たちは、安易にアドラー心理学をロジャースやマズローの仕事と同列に置いて、平俗化凡庸化してしまったような気がする。正直に見直すと、アドラー心理学の全体はまだまだカオスの中にある。そのカオスの中から、なんとか整合性のある、真に科学として妥当性のある体系を見つけ出すのは、われわれの世代以後の仕事である。

最近ドイツ学派とその影響下にあるイタリア学派が、ドライカースとはまったく違った形でアドラー心理学を再構成しつつある。彼らはアドラー心理学をフロイトの仕事の延長線上に据えようとしている。その当否は別として、そういうことが可能であるということは、とりもなおさず、われわれの知っているアドラー心理学がアドラー心理学のすべてでも唯一正統のアドラー心理学でもないし、あるいは今後まったく違った形に再構成される可能性がなくもないということを示唆している。

モーツァルトはレクイエム（鎮魂ミサ曲）の執筆途中で死んだ。いまわれわれが聞くその曲の後半分は弟子が作ったものである。モーツァルト自身が最後まで作曲していたならば、今の後半とはまったく違った後半がついていたに違いないというのが、音楽学者たちの一致した意見であるという。アドラー心理学もそうであって、アドラーがあとせめて20年生きていたならば、今のアドラー心理学とはまったく違ったものになっていただろうと私は思う。

もう一度アドラーの一生の著作を丹念に読んでみようと思う。彼が残した膨大な著書と論文を読破するのはたいへんな仕事であるが、それをしないことには話をはじめまらない。日本のアドラー心理学運動は、横の広がりという点では予想以上の成果を上げている。しかし縦の深まりということになると、まだまだ貧困としか言いようがない。もちろん、本誌を見ていただくとわかるよ

うに、アドラー心理学に関する論文がアドラー心理学以外の世界の専門誌等に続々と発表されるようになってきており、これは喜ばしい限りである。しかし、それらにアドラー心理学の目から見て何か新しい発見があるかという点と必ずしもそうではなく、単に伝統的なアドラー心理学を事例に応用した報告が多い。今はそれでも十分であるが、今度いつまでもそれではいけない。新しい展開がないのならば、早晩アドラー心理学は滅びるであろう。新しい展開のためには、解説書ではなくて原典に取りつくことしかないのではないか。

## 更新履歴

2012年6月1日 アドレリアン掲載号より転載